田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『小説家の映画』

7/29〜

[2022年／韓国／韓国語／92分]
監督・脚本・製作・撮影・編集・音楽：ホン・サンス
出演：イ・ヘヨン、キム・ミニ、ソ・ヨンファ、パク・ミソ、クォン・ヘヒョ、チョ・ユニ、ハ・ソングク、キ・ジュボン、イ・ユンミ、キム・シハ

© 2022 JEONWONSA FILM CO. ALL RIGHTS RESERVED

表現するということをめぐる深い思索

小説家のジュニは、ある日ソウル近郊の小さい書店を訪れた。かつて世話になった後輩が、いまは書店を経営していると伝え聞いたからだ。ジュニはいままでたくさんの小説を発表してきた著名な作家だが、このところ執筆から遠ざかっている。

ジュニの突然の訪問に驚いた書店主は、店先の椅子で近況などを話す。ソウルの知り合いとは連絡を絶って移り住み、ここが気に入った。小説はもう書かないと思う、と。そんな後輩に、ジュニは、自然体になったわね、と意味深い言葉をかける。

この日はジュニにとって不思議な一日となった。偶然の出会いがつぎつぎにあった。彼らとさりげない会話を交わすうちに、ジュニの、表現するということについての思いが漏れ出てくる。さりげなく語られるこれらの言葉はホン・サンス監督の考えでもあるはずで、それが普段の会話のように自然に話されるのは、この作品の大きな魅力のひとつだ。

ジュニは名所のタワー展望台に行き、旧知の映画監督夫妻に会う。彼らと一緒に公園を歩いていると、散歩中の女優ギルスに出会う。ギルスも映画界で名声を得ながら、いまは一線を退いている。仕事をしろとギルスに勧める映画監督に、ジュニは激しく反論する。どのような生き方であれ、その選択を尊重すべきだ、と。

ジュニとギルスは急速に親しくなり、ジュニはギルスの映画を撮りたいと言い出す。すでに業績のある成熟した2人の女性が、いままでのやり方には満足がいかず新たな試みに向かおうとする静かな意気込みが、落ち着いた画面で描かれていく。

ホン・サンス監督は、かつてはだらだらと恋に溺れる中年男や不倫をよく扱っていた。それを思うと、近年の作品に現れている変化は興味深い。この作品では、登場する2人の男性（映画監督と詩人）が、新しみのない論を振り回しているのに対し、女たちは自分たちの道を探りだそうと柔らかな言葉で生き生きと語り合っている。

さて小説家の映画はどんなものだったのだろうか。一部分だけカラーの鮮やかな場面は、いったい何を表わそうとしたのだろうか。ホン・サンス作品は、観客がそれぞれの立場で多様な解釈ができるのも魅力のひとつだが、この作品も見るたびに新たな発見がありそうだ。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。